

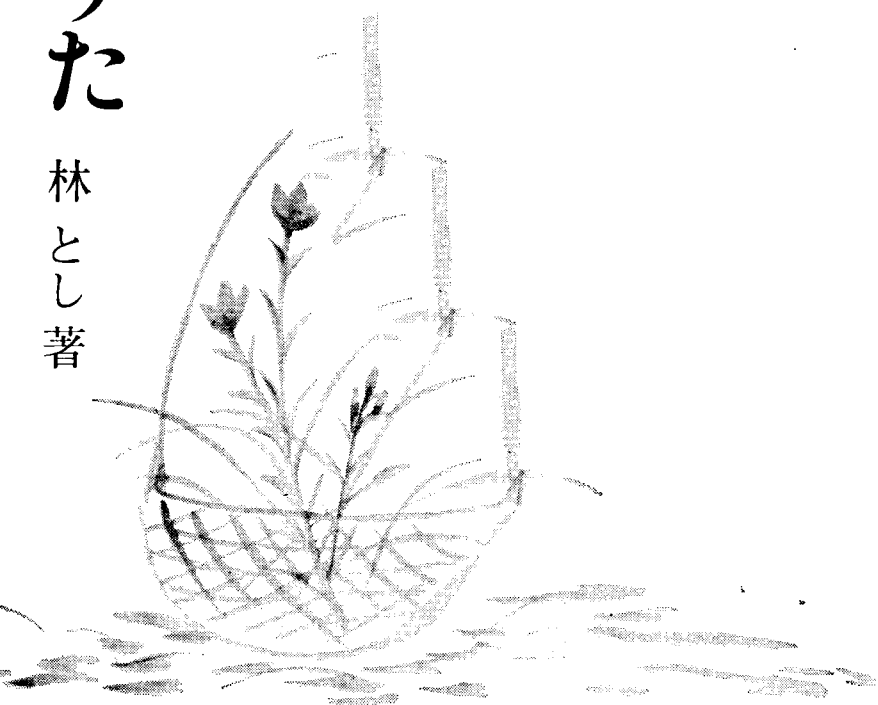
小説

いのちのうた

林とし著

小説  
いのちのうた

林とし著



印 止  
検 磨

〔著者略歴〕

明治25年静岡県御殿場市に生まる。大正4年東京女高師卒業。佐賀県女子師範学校、神戸親和高校教諭を歴任。  
大正7年結婚、二女あり。  
昭和14年以来「潮音社」同人となり現在に至る。昭和39年歌集『飛翔』を出版。  
現在「文京区哲学研究会」会長、歴史サークル「あゆみ会」、文学研究会（季刊・同人誌『自由像』発行）、短歌研究会等に参加している。著者現住所・東京都文京区小石川三丁目一七ノ一八 電話（八一二）八八三六

《装幀・出竹弘司》

△原書房・一〇〇冊選書15V  
小説

いのちのうた（下）

昭和42年9月30日 印刷  
昭和42年10月5日 発行

定価 460円  
郵税 70円

著 者

発行者

印刷所

発行所

成 林

藤 瀬

文 明

社 悲

房 社

株式会社

株式会社

株式会社

株式会社

株式会社

株式会社

株式会社

東京都新宿区花園町一〇六  
振替 東京 一五一五九四  
電話（三五四）〇六八五代表

《佐拔製才》

品目、落丁本はおとりかえいたします。

# 目次(下)

## 第一部

連戦連勝……………三

日本本土初空襲……………三九

銀婚記念の旅……………四〇

撃ちてしやまん……………四一

僥倖をたのみて……………四七

## 第二部

その夜を待たず……………五七

義歯……………五七

死闘……………五八

終戦……………六四

## 第三部

進駐軍……………一九一

# 第四部

|              |    |
|--------------|----|
| 決意は固く.....   | 三四 |
| 離れ住む.....    | 三三 |
| 残照.....      | 三九 |
| 潔を囲む.....    | 三七 |
| 虚飾なき女.....   | 二六 |
| 人は皆死す.....   | 三五 |
| 家庭というもの..... | 三五 |
| 飛翔.....      | 三〇 |

## 連戦連勝

昭和十七年の初光が地に這い、凍った風に乗った東天の赤い帯状の雲が、西へ西へ、かなりな速さで走っていた。幾つもの町内会の行列が、杉の森を背にした五毛神社の社殿に向かって、次ぎ次ぎに整列してゆく。整列の終るのを待って、神主が幣帛をかざして、一同にお払いを与え、それが終ると「二拍一拝」と先頭の町内会長の号令がかかり、勢いのよい拍手が森にこだまする。続く号令「右向けー右」で一同東に向きを替え、朝日を正面に浴びた。更に号令「宮城に向かって遙拝最敬礼」それを終ると、町会長の音頭で万才が三唱され、「連戦連勝おめでとうございます」という町会長の挨拶に合せて、一同が同じ挨拶の斉唱をする。解散のあとは、三々五々家族近隣の群が、話し合いながら、家々の軒に日の丸の旗がへんぼんとひるがえる町筋を、下駄や靴の音を寒々と響かせてわが家へ帰っていった。

奥田夫妻も真知子と女中を引きつれて、この早朝の神社参拝に参加した。口頃防空演習に出ている健康人は、皆参拝しなくてはならなかったのである。帰って見ると煉炭ストーブがどうやら食堂を暖めていた。昨夜帰って来た光雄と郁子、昨日午後に東京からついた光雄の兄の石田肇と、その娘陽子、それに社員の黒木誠、ふみも加わって大きな食卓を囲み参拝の一行を待っていた。

奥田夫妻は大正末年、高等小学校を出たばかりの朝鮮人白永大を、家庭に引きとり、黒木誠と名のらせ、会社に働かせながら、夜間商業を卒業させた。成績もよく勤勉でもあり、卒業後更に進んで、YMCAの英語学校をも卒業し、なかなか優秀な社員になり、奥田の秘書として働いていた。夜間商業にいた間は、奥田夫妻は彼を家族のように扱っていたが、卒業してからは、他の社員同様、会社の寮生活をさせていた。暮れから正月へかけては、年々手伝いかたがた、家族が家庭へ帰って来るように訪ねて来て、暮れの餅搗きは彼でなければならなかったし、正月の門松を立てるのも、皆彼の仕事であって、彼がいなくては正月が来ないような感じになっていた。例年通り今年も彼は、こ

の家族の中に加わっていたのである。

一同はテーブルを囲んでおちついた。支那事変も始めのうち、食卓にそれほど影響は感じられなかったが、ここ二、三年は一年ごとに乏しさが身に迫り、十六年の四月から、米は一日大人一人二合三勺（三三〇グラム）、六十才以後の者は二合、十七年からは米だけでなく、麦、甘薯大豆等をも加えると予告されていた。今年の食卓には、田作り代りに煮干しが使われ、トソの酒は合成酒の一人五勺、畑でとれた野菜の煮しめと煮豆、肉などもほんの申し訳程しかなく、只一つ豪華なのは、台湾の長兄から送って来たカラスミだけだった。けれど誰も食卓の貧しさなど言うものもなく、新しい戦果に顔を輝かしていた。

「光雄君は脚光を浴びた産業戦士だね、戦時の花形だよ。

ご苦労なことだ」

奥田は愛情の溢れる表情で、息子を眺めるようにじっと見た。

「いや戦線に立っている人達のことを思ったら僕など申し訳ないです。然し運が強いというのか、今の処まだこうして居られて仕合わせです」

そう言うのをきいただけで、郁子の目はもう涙で光っていた。食堂の壁にもバーラーと同じ大きな世界地図が貼っており、支那事変以来、戦勝ごとにそこに日の丸を書き入れていた。十六年十二月八日からは、それ迄と区別するため、ぬりつぶしの赤丸に代えていた。ハワイ真珠湾奇襲以来十六年十二月中に赤丸は十二にもなっていた。

「戦線の将兵は誠にご苦労様なことだが、どうも全く思いがけないほどの戦果で、この正月ほどめでたいことはないな。支那事変も始めのうちは華々しかったが、長引くにつれて、だんだん泥沼にはまり込んだようで、じり貧になってゆくのを、あてもなくじっと耐えているのは、やり切れなかったからね」

奥田は乾杯の盃を置くと、しみじみした調子で言った。  
「月々火水木金々（土曜も日曜もないこと）の猛訓練は、横須賀へいっても呉へいっても、感じられますよ、凄いいのですね、僕達の工場だって、今じゃ月々火水木金々は合言葉ですからね、大晦日も正月もあったものじゃありませんよ」

光雄は頻繁に呉と横須賀への出張が続いていた。昨日の

三十一日も平日通りに働き、夫婦が来たのは夜の九時に近かった。それからうち中が大晦日の晩餐であったのだから、除夜の年越し蕎麦に、引き続きのような時間であった。そして元日一日だけが休みで、二日からはいつもの時間に、工場は働き出すのである。日支事変が膠着状態になって以来最早赤紙の来りこともあるまいと安心して、五人も子供のあるものまでかり立てられて、緊迫感だけをのらせていた国民は、へい、よいこれで決着がつくのだ、最後の力を振り擽って遠からず勝つのだ、とほっとして、長い間の緊張感から解放された感じを持った。石炭を入れずに機関車を走らせようとするような状態に、国民全部が置かれていたことには気付かず、糠喜びをしたのである。ガソリンの一滴は血の一滴と言われていたこの頃、バスなどは既に以前から、エネルギーの少ない木炭をたいて、走っていたので、少し坂道にさしかかると、不愉快な唸りを上げ、乗客の空腹を、いやが上にそそり立てていたものだが、バスのこの状態は、そのまま国民一人一人の、偽らざる日々の状態であった。開戦三日目の十二月十日に日本海軍の基地航空隊が、英国の不沈を誇っていた最新鋭の戦艦

プリンス・オブ・ウェールズを旗艦とする東洋艦隊の主力を撃沈した報道は、国民を一層熱狂させ、八月々火水金々、日本の日本海軍猛訓練の精神力が、世界最強の伝統を誇る英海軍を滅したのだと、国を挙げて有頂天になり、忽ちその言葉は、国民の中に広がり、幼児達まで意味もなく、調子のよいこの言葉を、歌のように、口にするに至ったし、戦争指導者達自身も、この勝利を、只日本軍の精神力と、訓練の結果であると思ひ込み、国民にもそのように説明したが、実は飛行機の力が、空軍の護衛のない船艦に勝ったということであったのだ。そのことに気づかず徒に、勝利を誇っている間に、敵はいち早くこの失敗から、その原因を発見して戦法を改め、航空兵力中心の機動部隊編成に移り、やがて日本は、その機動部隊のため、決定的な打撃を、受けることになるのであるが、ともかくも、連戦連勝のうちに迎えた昭和十七年の新春は、国民に新しい希望の灯を、感じさせたのである。

「一日も早く戦争は片付いて貰いたいですね、この節の患者は殆ど、栄養失調が原因の病氣ばかりですよ、薬も思うようにはありませんが、たとえばどんないい薬があったとし



ても、必要なカロリーの半分も与えることのできない今日、薬だけで病気のなおしようはないですからね、栄養不足と過労ですから、全く医者立場からは、手のつけようがありません」

彼、石田肇は光雄の長兄で、内科医であった。強い近視眼のために、兵役は逃れていたが、次兄はやはり医者で、既に軍医として応召していた。

「私はね、こんなこと言ったら、非国民と言われましょうけど、戦争はどう考えてもいやです。何と言ったって、人間の殺し合いですもの、それもチャンチャンバラバラの頃なら、規模が小さかったんですけれど、何しろ飛行機まで使う今の戦争は、大量殺戮なんですから、地獄絵にだって、描きようがありません。これほど残酷な、人間の行為なんて、昔の人には、考えようもなかったでしょうね、人間の知恵というのは、恐ろしいものですわ」

寿美が息をはずませるようにして言った。日出度いと戦勝を心から喜ぶ奥田の言葉を受けて、はしゃぐものは誰もなかった。

「ほんとに、国民の誰だって、戦争を喜んでる人は、ない

と思いますわ、それなのに、どうして皆結束して、止めさせることが、出来ないんでしょう？」

寿美に続いて郁子が涙に光る眼を上げて言った。どんなことでも、努力によって解決のつくことなら、やっつてのけると言った激しい気性の郁子だったけれど、全くどうすることも出来ない夫の明日の運命に、夜となく昼となくおびえ通しで、耐えられなくなれば、泣くより外にすべがないとんでもない時代なのだ。郁子の涙を見ては、誰にも言葉がなく、一瞬死んだような時間が過ぎた。

「戦勝に輝く元旦に、そうめそめそしても始まらない、さあまずお雑煮を食べて、それから合唱でもしようじゃないか、真知子がピアノを弾きなさい。君が代と年の始めを歌おう、そのあとは何でもいい、歌って景気を出そう」

奥田が元氣を出して言った。雑煮といっても僅か二合づつの配給の糯米に、無理をして二合三勺の配給米の中から、とって置いたうるち米少々を混ぜて、コンクリートで作った、小さな臼で搗いた餅に、畑でとれた大根や菜を刻み込み、だしもろくろくきいていない雑煮なのだから、平時なら犬も喰わない食物なのである。空腹ということは、人間

の味覚をどこまでも鈍感にする。食事を終ると、真知子のピアノに合わせて、みんな東を向いて直立し、君が代と、年の始めの歌を合唱した。無理にも声を張り上げて歌ってみると、複雑な感情が不思議なハーモニーを作って、胸がジーンと熱くなった。そのあとは一人一つずつ、自分の好きな歌を指定して順々に合唱した。東京から来た国民学校五年生の陽子は、予科練の歌がいいと言った。次ぎ次ぎに喉の痛くなるほど歌った。

「おばあ様は何？」

と真知子がふみにぎいた。

「私は君が代と年の始めだけで、充分ですよ」

と答えたが、どの歌にもふみは、少しずつ声を合わせた。

そのあと、トランプやカルタで賑かな時が過ぎた。カルタの時は、

「変体仮名ならとれるが、平仮名ばかりでは、とれないから、私は読み手を引き受けましょう」

とふみは何度も読み上げた。元日であっても新体制以来、年賀状は禁制とあって、一枚の葉書も舞い込むでなし、知人の安否を知るためには、平素に通信する以外はなかつた。

書信もその筋に必要ありと認められる場合には開封されても、抗議は出来なかったから、厭戦と取られる言葉などは、一切書かれなかった。

「本人差し戻し」として、理由も書かれず戻って来ることがあった。読み返して見ても、どこが悪かったのか、納得のいかないことがあったし、又ある時は、先方へ不着のこともあって没収されたに違いないと思っても、それを糺すことなどは、蠚蛇になることを知っていたから、誰も泣きね入りの外はなかった。要するに耳に口をあてて、囁くことの出来る距離にあるものの外は、自由に意志の疎通は、出来ないと言っても、過言ではなかった。息子を戦線へ送っている母親への、どんな同情も、武運長久とか、戦勝、勲功などという言葉以外に、表現は出来ないのである。

翌朝は五時の朝食にして、郁子夫婦と光雄の兄と、その娘とは、六時前に出発して京都へ向かった。光雄はそのまま職場へ、郁子は義兄を新居に案内し、京都見物をさせようというのであった。まだ暗い道を灘駅へ、奥田夫婦に真知子、それに黒木誠までが加わって、曉の寒風に、吹きさら

されながら送っていった。その帰り道真知子が父親と腕を組んで、早足に坂道を上るそのあとから、少しおくれで寿美が、あえぐように歩いている傍へ誠がよって来て、「小母さん押しましようか？」と声をかけた。

「まだお婆さんではないから大丈夫、急ぐと暖かくなって丁度いいわ」

と答えると、それなり黙って歩いていたが、「僕あのー小母さんに相談したいことがあるんです」

と言いつつ話し出した。

「相談して何？私だけに相談したいの？」

と振り向くと、彼は足もとに眼をおとしながら、

「社長さんにはちょっと言い悪いのでー、小母さんに先にきいて頂きたいんです」

「そう？改まって何かしら？じゃあうちへ帰ってゆっくりききましようね、あてて見ましようか、お嫁さんをほしいるんじゃない？あなたももう、二十九だものね」

寿美が言うと、彼は何とも答えなかった。寿美は悪かったと思った。かねがねそのことが気にかからないではなかったが、何分朝鮮人であることを隠して、出来る事柄では

なし、寿美には朝鮮人に知り合いもないので、一度母親に会って相談してやろうと思っただけが、いつという時もなく、過ごしている間に、二十九才にもしてしまったことを、気の毒だったと反省させられた。いろいろ言っただけでも、やはり彼は朝鮮人であることに、コンプレックスを感じることから、逃がれられないようであった。話してやるとその時は、「はい判りました」と素直にいうのだけれど、どうにもならない気持は、よく読みとれた。家へ帰ると間もなく、奥田はちょっと会社まで行って来ると出ていった。そのあと寿美は、早速誠の話をきいてやろうと思いい、「二階のサンルームに彼を呼び、向かい合って腰かけた。かなり高く上った朝日の無数な光線が、硝子を通して二人の上に降りそそいだ。

「さあ早速お話をききましよう」

とくつろいだ。

「はい、僕言にくいですがー僕好きな人がいるんです」

「そう？それはよかったわ、でそれはどこの人なの？プロフィールしたの？委しく話してご覧なさい」

笑みを含んだ視線を、静かに彼の顔に向けた。「実はそ

のー会社に勤めている女の子なんです」

チラと合った寿美の視線をさけて言った。

「会社のもって、うちの会社の？私の知ってる人かしら？」

寿美は知ってる女社員の、誰彼を考えて見た。

「時々社長さんのお家へ、使いに来るようです」

そう言われて、寿美は、

「ああ、あの川本さんて人？」

「ええ」

いつでも女学生のように、セーラー服を着た下げ髪の娘、寿美はすぐに思いあたった。

「川本そのさんていったかしら？女学校の生徒のように見える人ね、まだ若いでしょう？会社の中で親しくなったの？」

「去年の夏、同窓会があって学校へいったら、あの人も来ていたんです。それであの人が、長田学校の出身の事を知りました。それまでは会社においても、別に話したこともありませんでした。同窓だと判ってから、急に親しいような気がして、別に話すというほどでもありませんが、顔を合わせると、ちょっと口をさく程度になりました」

「あの人は会社にどのくらいになりますか？」

「昭和十三年の四月に、入社したと思いますから、五年目になります。今年十九になったと思います」

「そう？それで大分深くつきあってるの？」

「深くってことありませんが、二、三度映画に誘いました」

「お互いに身の上の話でもしましたか？」

「ええ、少し」

彼の話すところによると、彼女には両親がなく、祖父母に育てられていたが、小学校二年の時、その祖父母も亡くなり、叔父夫婦に引き取られて、そのまま現在も世話になっていくという。四才の時に父を亡くし、その後二年程して、母は彼女を祖母の手許に置いて再婚してしまった。叔父にも同じ年頃の子供があるので相当苦労しているそうであった。誠の方は親兄弟のことは一応話したが、肝心の朝鮮人であることは、どうしても言えなくて、まだそのままになっているそうであった。

「それであなたは愛情を打ちあけたの？」

「改まった言葉では言っておりませんが、判っていると思

います」

彼はつまり彼女に対して、結婚の申し込みを、して貰いたいというのであった。川本そのというのは、小柄な目立たない娘で、一度や二度あっても、印象には残らない、名もない野花のような娘であった。女子社員は他にもいくらかもあったが、彼がこうした娘にひかれたのは目立たない彼女が、一般の男子に認められそうもないからであろうと寿美は考えた。

「私が申し込んで上げるとして、結婚となれば戸籍の問題もあるし、朝鮮だって同じ日本なんだから、とり立てていうこともない筈だけれど、そもいかなからやはり、一切のことを話して、了解して貰わなくてはいいけませんわね」

寿美がそう言った時、彼は一瞬当惑したような、不安な表情になったが、すぐおちついて、

「よろしく願います」

と頭を下げた。

「それでああなたのお内の方では、不賛成なことはありませんか？」

寿美は一応念を押した。

「はい、それは決してありません」

中年以上の朝鮮人の中にはまだ、民族意識の強い、相当抗日感情を持った人々もあったので結婚ともなれば、一応家族の意向も確めて置く必要があった。若い者になると、そのような意識より、劣等感の方が強く、コンプレックスから来る一種の反抗心がないとは言えなかった。そのような点でも誠は素直で、只彼が劣等感さえ捨てることが出来れば、堂々とした青年なのである。

その夜寿美は、夫に誠のことを相談した。奥田も丁度よい縁だろうから、何とかまとめてやろうということで、正月早々慶事が持ち込まれたように感じた。誠は三日迄いて、その夜「尽力してやるから安心し給え」と奥田が気軽に言ったので、嬉しそうな表情をして、寮へ帰っていった。十二日になると、真知子も父親の東京と一緒に学校へ帰ってしまったので家の中は洪水の退いたあとのように、ひっそりしてしまつた。真知子の母校の仕度もあって、それまでおちついた時間がなく、二人を立たせて漸くひまになつた寿美は、いよいよ一月十八日の水曜日、川本そのを呼ん

で、誠のことを相談して見ることにした。

その日の午後、彼女は間違えるほどきれいに装って訪ねて来た。細い目も小さな鼻も彼女を初々しく感じさせ、花模様の銘仙で、上下アンサンブルにしたモンペ姿が、戦時の娘をいかにもキリリと見せていた。寿美は又二階のサンルームに、彼女を案内した。晴れた日でさえあれば、ストープの部屋よりずっと暖かく、午後の日ざしの時などは、水銀柱が三十度にも上るので、その時刻は硝子戸をあけなければ、使われない時もあった。娘に話すのは、青年の場合のように、単刀直入にも切り出せないような気がして、寿美は会社の様子などあれこれときいたり、東京工場の方へ、ゆくつもりはないかを尋ねたりした。

太平洋戦争勃発と同時に、貿易は完全にストップしてしまった。既に以前から平和産業工場は殆ど軍需工場又は、その下請工場に転換させられ、商店その他、軍需産業に関係ない仕事に従事している人間は、容赦なく軍需産業へ徴用されていたので、日ボ商会も、貿易が出来なくなると一緒に、日ボ興業KKと社名を改め、東京蒲田にある、軍需会社の下請工場を、従業員つき買いと、潜水艦、戦車の

部品を製造することにして、日ボ興業社員の中、希望者は皆この方に転勤させ、本社には少数の者を残して事務に当たらせ、且つ物資の販売をもさせることにした。日ボ商会当時の社員の中、三分の一くらいは応召した者、徴用されたもの、他の工場に自ら転勤した者などがあって、東京へ移ったものは四十人に充たなかった。

川本そのは、東京行きで相談で呼ばれたと思ったらしく、「私は叔父の処に、いたいとは思っておりませんか、東京へやって頂かれれば、喜んで参ります」と答えたので寿美は、案外黒木との話も、簡単に運ぶかも知れないと思った。

「実はね、川本さん、今日来て頂いたのは、会社の方のお話ではないのよ、あなた黒木さんと、親しいらしいのね？」  
寿美は一旦言葉を切って、彼女の表情をうかがった。彼女は当惑したように、下を向いて、膝の手に目をおとし、顔を赤らめて答えなかった。寿美は彼女が小言を言われるのだと、受けとっているのではないかと、その表情から推察したので、すぐ言葉を続けた。

「私は小言なんか言っているんじゃないのよ、実は黒木さ

んが、私に話しに来たの、だからあなたの気持ちをきいてあげようと思ったの、ほんとのことをきかせて頂戴」

彼女は下を向いたままで、

「私二度ほど、映画に誘って頂いたことがあります。それからいつだったか、喫茶店へ一緒にいったことがあります。それくらいです」

と小さな声で答えた。

「あなたは黒木さんが好きではないの？」

「……」

「黒木さんは、あなたを好きなんですって」

そういつてじつと表情を窺った。耳まで赤くしていた。

「私無理に、強いようとは思わないのよ、でもね、若しあなたの方でも、好きなようなら、お話を、結婚へ進めて上げてもいいと思つて来て頂いたのよ」

そう言うと、始めて彼女は、少し顔をおこして軽く肯いた。

「あなたもそれを希望しているのね？ 実はね、黒木さんがそれを私に頼みに来たの、あなたが同意なら、私があなたのお内へ、お話にいつて上げようと思つてね、あなたご両

親もおばあ様も亡くなられたんですってね？」

それから、ぼつぼつ彼女は話し出した。大体誠からきいた通りの事情で、叔父は三菱の職工で、子供が四人あり、二番目の女の子は、彼女より一つ年下だそうで決して憎まれてはいないが、出来れば叔父の家にいつまでも、世話になつていたくないので、月々五円を食費として入れ、あとは出来るだけ儉約して貯蓄し、いつでも独立出来るように、なりたいと思つてしていると話した。それで寿美は、

「あなたは、黒木さんの身の上のことは、知つていらつしやるの？」ときいて見た。

「よくは知りませんが、お父さんは亡くなられ、あの人が一番上で、下に妹さんと弟さんが、あると云うていました」

「それでお国はどこか知つていますか？」

「いゝえ」

寿美はちよつと躊躇したが、わざとくだわりなく、

「あの人朝鮮なのよ、知りませんでしたか？」

と一気に言つた。

「知りませんでした」

と彼女は言ったが、そう驚いた様子もなかった。あるいは朝鮮人だとらなかつたかも知れなかつた。寿美は念を押すように、

「朝鮮だって立派に日本なんだから、そんなことに、こだわることはないと思うけど、でも一応、お話しておかないといけないからね、その点だけが、叔父さん何と仰るかと思つて、少し気になりますけど、どうかしら？」

そのはちよつと顔を曇らせたが、

「あのーうちの叔父さんも、三菱の職工で、朝鮮人がそこにも働いています。別に何とも、言いへんと思います。それで黒木さんは、どうして日本の名前になつてつてですか？」

「ほんとと白永大というのよ、でも学校や会社でやっぱり日本名の方がいいから、私共が黒木誠という名前をつけて上げたの、人物もいいし、頭もいいし、勉強もしているし、朝鮮人ということさえ、いやでなければ、とてもいい人だと思ふの、どう？あなたさえはつきり決心がつけば、叔父さんに話しにいつて上げるわよ」

「はい、私、勿体ないくらいやと思います」

そうと話が始まると彼女は、いそいそと顔を輝かして歸つていった。寿美はその翌日早速川本そのの家庭を、奥平野の山の根へ訪ねていった。後に山を控えた南向きの土地なので風をさえぎつて、この一帯は暖かい場所だった。小さな家であつたけれど、きつちりと片づいていて、こざつぱりしていた。叔父は留守であつたが、その妻は、寿美が訪ねていったことを、非常に恐縮し、何度となく頭を下げた。その縁談だと言つて、一部始終を話すと、主人が留守ではつきりした返事は出来ないがと前置きをして、こちらも孤児のことであり、何の仕度もしてやれず、裸のままでよい処があれば、どこへでも主人は賛成するだろうと、やはり邪魔ものらしい言い方をした。然し何はともあれ、縁談は心配なくまとまりそうなので、内心ほつとした。それから三日ほどした夜、川本そのの叔父が訪ねて来た。生まれながらの職工のような感じで、四十四、五くらいに見える小柄な男だった。

「女の子はなんぼ自活しておつても、無事に縁づける迄は、重荷どすさかい、ほんまにあり難いことだす。この上は何とか、裸のままでもろて頂けるようにご尽力願えまへ



んやろか、えらい欲どうしようだすけど、うちもたんな子持ちだすよって、手がまわらしまへんだす。どうかよろしにお願い申します」

いろいろと、回りくどく話していたが、最終的な彼の意見は、結婚費を使わず、あとの心配のない処へ、とつがせたい希望で、相手が朝鮮人であることなど、意に介しないということであった。誠にしてみれば、何とかまともな女でさえあれば、容貌がわるかろうと、貧しかろうと、日本人と結婚したいというのであるから、全く良縁というべきであった。

奥田は貿易会社から、軍需産業への転換で、神戸東京間の、目まぐるしい往復の生活が、一層激しくなり、その上ドイツへの、礦石輸送の問題も、まだ残っていて、相変らず家庭におちつく余裕はなかった。従って黒木誠の問題も、寿美がそこまで話は進めたものの、それ以上具体的に事を運ぶのは、適当な時を待つ外なかった。

召集はいよいよ激しく、日ポ興業の東京工場は次第に人手不足になり、沖繩、奄美大島等から、青年男女を募集した。熟練工の応召のあとを、新工員で埋めてゆくのだか

ら、自然製品が検査に合格せず、この事情はいずれの工場も同じであったので、検査の標準は、次第に下げられてゆく外はなく、不良軍需品が前線へ出まわる結果を生んだのである。

奥田はその後も、次第に東京滞在が長くなり、ホテル住居で、塩水のような実もないスーブや、大きな皿に小さな人參の二切か三切、何の肉とも知れない、一口にも足りない肉片、二、三枚の大きな皿は、出したり退いたりするのだが、器ばかり大きく立派で、腹にはいるものは、殆どのない。彼はそんな生活を長くしている間に二十四貫もあった体重が、今は十八貫もなくなった。寿美はひどくそれを案じて、物資のない中でも何とか工夫して、幾分でも栄養のとれるものを、食べさせてくれる宿はないものかと、上京の時は友人や知人に依頼して、探し歩くのだが、誰も自分の食べることで精一ぱいなこの頃、人の事まで責任をもってくれる人はなく、商売としての下宿屋なら、ホテルと変ったことはなし、彼女はS氏に依頼して見てはと、いつも夫に勧めるのだったが、私事で他人を煩わすことは好まない、とり合わない、とうとう夫に無断でS